

お茶うけ 第19話

ブルガリアの民族衣装

仕事で何度か訪れたことのある懐かしい国、ブルガリアの展覧会があると知って、特別展「ブルガリアの女性と伝承文化～風土・こころ・暮らし～」を観に、新宿の文化学園服飾博物館へ参りました。ブルガリア国立民族博物館のコレクションから、19世紀の人々の生活様式と伝統および風俗などが展示されていました。

ブルガリアは、バルカン半島の東部に位置し、先史時代から人が住んでいた歴史の古い国です。北はドナウ川をへだててルーマニアと、西はマケドニアなどと、南はギリシアおよびトルコと国境を接し、東は黒海に面しています。地理的にヨーロッパとアジアの接点に当たるので、古くから東西交通の要衝でありました。現在でも、オリент急行の名で知られるフランスのパリとトルコのイスタンブールを結ぶ鉄道は、ブルガリアの首都ソフィアを通っています。産業は、第2次大戦後は重化学工業化に力を入れています。国旗の色(白、緑、赤)の緑が農業や森を表すと言われますように、以前は産業の中心は農業でありました。



ブルガリアに於いても、暮らしを彩る織物や刺繍は、伝統的に各家庭特に農家で糸を紡ぎ、機を織るといふ形で受け継がれてきました。今回の19世紀を中心にした展示でも、ブルガリア刺繍の3つの基本色(赤、黒、白)を織りなした、幾何学模様のデザインの良い作品の数々がありました。

しかし、女性の衣装と言えば、何といても婚礼衣装でしょう。数組の民族色豊かな婚礼衣装が目を引きました。しかも、美しく着飾った新婚カップルの人形や、付き添いを従えた婚礼の行列を模したのものなど、楽しく鑑賞しました。

特別展の解説書によりますと、婚礼の風習には、新婚夫婦の幸福を願ったいろいろなしきたりがあるとのこと、洋の東西を問わない親心の現れと微笑ましくなりました。

たとえば、新婚夫婦は、花嫁の家から見送られる時は、厄払いのために広げられた真新しい赤い腰帯をまたいで出掛けます。また、花婿の家に迎えられれる時は、将来の幸運を招くように白いシーツを踏んで入ります。

以前、ソフィアのホテルで、結婚披露宴が終わって、花嫁花婿が退場するところに出会いました。花嫁は真っ白なウエディングドレスでした。喜び一杯のお2人は、人々の間を祝福のお米を浴びながら歩いて来ます。ふと、肩を寄せ合った2人の首筋に掛けられた一本の大きなネックレスが目にとまりました。若い2人を一本のネックレスで結ぶのは、これから2人が一緒に力を合わせて、新しい家庭を築いてゆくことを象徴するものであろうと思いましたが、果たしてこれがブルガリアの結婚式の一般的風習なのかという疑問が残っていました。

今回、この疑問に答えるような記事を、特別展の解説書に見つけて嬉しくなりました。

「西ブルガリアでは、新婚夫婦が家に入る時、姑が2人の首に腰帯を掛け、これからお互いに理解し合って幸せに満ちた結婚生活を送ることを願う習慣がよく見られる」とあります。

すると、あのネックレスは、腰帯を掛ける古い風習の心を受け継いだ、新しい形であったのかなと思ひ巡らしています。(『ブルガリアの女性と伝承文化～風土・こころ・暮らし～』文化学園服飾博物館 編集・発行などを参考にしました)

以上